

歴史に、もしもはありません。

しかし、もしも、日本におけるテレビの誕生があと5年遅れていたら、この国の歴史は大きく変わっていたかもしれません。円が世界経済の中心を担うことも、世界に先駆けてハイブリッド自動車が発売されることも、4000本のヒットを打つ日本人バッターが生まれることも、なかったかもしれません。

日本でテレビの試験放送が始まったのが、1951年。その2年後には、NHK、民放ともに、本放送が開始されました。サラリーマンの月給が約3万円の当時、14インチのモノクロテレビの値段は約20万円。人々は、街頭テレビに群がり、外国人レスラーを次々と倒す力道山の空手チョップに熱狂しました。1958年、長嶋茂雄プロ野球デビュー。1964年、東京オリンピック。——テレビという「魔法の箱」が、日本人に、「敗戦」の陰鬱を忘れさせ、「復興」に向かって明るく前につき進む「勇気」と「自信」を与えていったのです。

「魔法の箱」の誕生が、あと5年遅れていたら……この国がかくも早く立ち直り、猛スピードで復興へとつき進むことは、なかったかもしれません。

はじめに

エンタテインメントが多様化した今、「テレビがあるから頑張れた」時代とは、状況が大きく変わりました。では、これからの日本の復興を精神的に支えてくれるエンタテインメントとは、何なのでしょう。60年前のあの街頭テレビに代わる『魔法の箱』は、何なのでしょう。スマートフォン？ ツイッター？ フェイスブック？ それとも、「変わらずテレビ」なのでしょうか。

テレビは、今どこにいるのか。どこへ向かうのか。あの魔法の箱は、これからも魔法をかけ続けてくれるのか。その答えを探るために、6人のテレビマンにインタビューしてみました。

2013年9月

株式会社インタラクティブ・プログラム・ガイド

高度成長時代、日本人は「テレビがあるから頑張れた」のです。

一日のつらい労働も、家に帰りテレビをつければ、忘れられた。「明日も頑張れる」という気持ちになれた。大晦日になれば、家族みんなで紅白歌合戦を見た。どんなに苦しい一年だったとしても、テレビをつければ、「今年も無事年が越せる。来年はもっといい年にしよう」という気持ちになれた。そして、また猛烈に働いた。——そんな日本人一人一人の、一日一日、一年一年の積み重ねが、世界屈指の先進国をつくりあげたのです。

経済はもとより、学術、医療、文化、芸能、スポーツ……さまざまな分野において、世界トップレベルの力を育んだ日本。その精神的な原動力になったものの一つは、まちがいなく、テレビというエンタテインメントの存在です。だから、「戦後の日本の歴史は、テレビの誕生とともに始まり、テレビの普及とともに刻まれていった」と言っても過言ではありません。

テレビの本放送が開始されてから、ちょうど60年。バブル崩壊、リーマンショック、そして東日本大震災。いみじくも、日本はまた「復興」の時を迎えています。新しい日本を創っていかなければならない時を迎えています。

東京志向を、まだ続けますか？

東京の真似を、やめよう。

量の論理から、脱却しよう。

テレビ局ネットワーク図

それでも地球は動いている。

暇すかしい仕事。

先輩の問題。後輩の問題。

電子番組表（Gガイド）のしくみ

藤村忠寿

伊藤隆行

28

31

38

48

50

53

59

67

目次

テレビ番組をつくる人

あの番組をつくった、あの人に、
思いきり叫んでもらいました。

はじめに

2

楽しくなければテレビじゃない。

10

① オトナたちの「勇気」がなくなった。

宮道治朗

13

② 自信がないから、飾りでごまかす。
誇りがなければ、コピペですます。

22

11

そして、テレビはカラオケになった。

合田隆信

12

それでも、テレビは減びない。

134

テレビと共に歩んだ日本の60年②

144

おわりに——『魔法の箱』の後継者たちへ——

147

勝つことよりも大切なこと。

7 数字は、意識はしても、とりには行くな。

西田二郎

8 「待つ」ことが、「攻める」ことになる。

83

テレビ番組情報の取得源の推移

95

テレビと共に歩んだ日本の60年①

96

ガラパゴスの未来

98

9 オリジナリティは探すもの？つくるもの？

102

遠藤圭介

10 遠回りは、悪くない。

117

11 デジタルという黒船がやってきた。

124